
バカとテストと英霊達

御根通久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと英霊達

【Nコード】

N4422BA

【作者名】

御根通久

【あらすじ】

明久は幼少の頃より自分を守護する英霊の存在を知っていた。ただ、その事は誰も信じてなどいなかった……。それでも明久は馬鹿にされる事を知っていても英霊達を嫌わず、まっすぐ生き続け、征服王と英雄王の教育（！！！？）を受け、のびのびと成長し続けて文月学園に入学し、試験召喚戦争でFクラス代表となって全てのクラスを征服するという野望を持っていた……。だがしかし、運命は明久にFクラスに入るなと拒絶したのである。これは、英霊達と明久による試験召喚戦争での物語である。

明久×姫路・明久×島田は確実に無い上に姫路と島田は酷い目に合う可能性が高いです。Fateシリーズとクロスしてますが世界観はバカテスのまま。

後は、表立って動く転生者とモブ転生者が複数いますので注意してください。

プロローグ（前書き）

.....なかなか筆が進まないのもまた気分転換に書いて溜
まったものを

投下いたします。

こういうことをやってるから物語が進まないんですよねー.....

バカとテストと英霊達、よければ楽しんでいってください

プロローグ

「なんと仰られましたか？」

「何、今度君の担当する世界に20人の人間を転生させるから調整よろしく、と言っただけだが」

いくつものコンピューターが並んでいる室内で、一人の男性が別の男性に呼ばれ、話を聞いていたのだが、出てきた内容に目が点となったのである。椅子に座っている方の男性はその反応を予測できてはいたので、特に咎めはしなかったのである。男の後ろに並んでいる数人の男は、その数のおおさに目が点となっており、下手したら自分達もそうなる可能性が高いのではないかという不安で顔が青くなっていた。

「いやいや、4・5人ぐらいなら結構話は聞きますけど………何がどうして

そんな人数を送り込む事態になるんですか!!?」

「仕方がないだろう、時期が重なってちょうど空きがあるのが君の担当

世界軸しか空いてなかったのだから………君のところに資料は転送しておくから

さっさと作業に取り掛かってくれたまえ………まだまだ仕事が

あるんだ」

椅子に座っている男の言葉に、そういえばこの人休み取ってないんだったと

思い出しつつ、仕方なく渋々と引き下がった。

自分のところではほぼ休みをとり放題だったので、その分のツケが来たのだと

納得させながら。

《君のところは5000人だ》

《

え?》

瞬間、室内の時間が停止した。

他に作業をやっていて話を聞いてなかったはずのものも、20人で頭を

痛めていた者も、後ろに並んでいたものも同様に止まった。

《ちよちよちよちよーっと待つてくださいよ!!!?確かに多いことは

理解してますけど、1000人を超えることはなかったじゃないですか!!!?》

いくら人気の世界観とはいえ1000人は異常ではあるのだが、5000という

数字の前には霞んで見えてしまう。

男はその男の運の悪さに涙しつつ、自分の担当を完了させるために席に戻った。

《ほかの課だと万単位が出たからまだマシだ……》

《その人大丈夫!!!?》

残業とかそういうレベルを遥かに超えてる地獄のような言葉に部屋に居た人物は
全員涙して、後で差し入れを用意してやろうと誓っていた。

*

「なんだ、こりゃ」

いざ、20人に欲しがっている能力付与して送り込もうという段階で……

不可思議な要求が多々あった。

一応可能ではあることなのだが、わざわざ自分では無く他人に対して能力を

付与しているという異質な点だ。

「おまけに登場人物を増やすためにわざわざ能力要求してる奴が

……
何考えてんだこいつら」

確かにこれ以上はないほどに影響を受けまくっており、しかも他者に能力付与した者の全員が、原作主人公無双を見たいというある意味全部投げてる要求なのだ。何故だか、原作破壊を目指してハーレムを目指そうとする奴よりもタチが悪い。

「まあ、いいか。とりあえず仕事仕事」

要求通りに、本来居ないはずの人間を転生させ、願った人物を存在させ、世界的にはギリギリありえるが与えられない能力を与えて作業を終えた。

こういう単純作業を繰り返していると他の世界からの転生者の存在は割とありがたいものである……何故ならば、転生者の存在が無ければ完全にマニユアル通りに進めていくだけであり、単純作業にしなければならないのだ。

とはいえ、送り込んでいる奴らは担当人数を減らしたいが為に行なっているだけなので、男は感謝などしない。

「えーっと、この人物をつくりあげて……この人物に英霊の付与見事に被ってないな……ちょうど7だから勝手にクラス設定しておくか。

で、一応コイツの対策の為にこの英霊との絆補正を増やして、この人物が

付与対象に興味を抱くように設定して、と」

そこまで打ち込み、後は転生者のデータを纏めて要望通りに改竄するだけである。

全員容姿が似たようなものであり、名前もちよっと疑問に思うしか無いのが
多々あるが、今回だけではなかったのではや慣れている。

《主人公の兄とか妹とかになるやつが60人も居るー！ー！！
！？一般人に

こんな数産めるわけないだろ！！？糞！年代指定してないから
なんとかバラバラに分散して 原作時期に0歳もいるけど
知らん！

原作に赤ん坊でなんとか関われこのやろー！！》

《《《なにそれこわい》》》

「それ以前に養えないだろそれ」

5000人転生のところはなかなか大変そうだった。
並行分散しても足りないといしか言いようがない。

割り振るまでは何を要求しているのかわからないのでああいっ状態
になりやすい。

文句は大元のシステムを作り上げた存在に言うしかないので誰も上
司に直談判を

行なったりしていない………上司も確認と割り振りをしっかりと行
なっているし、

男たちよりもむしろ多く働いているのだ。

文句など言えるはずもない、というか言ってはダメである。

「さて、設定完了………洗脳関係を要求した奴が居なくて何よりだ」

居たら居たで面倒事しか引き起こさず、酷い結末にしか及ばなかったのだ。
好意を増幅させ、やりすぎて世界中の全員がその人物に対して病むほど心酔し、
死亡したと同時に自害したのだ……一斉に。

「ま、どのように動くかは楽しみだねー、他の世界から
「バカとテストと召喚獣」と呼ばれている世界は」

デフォルトの時間軸も同時に起動させて、違いを楽しみ始めた。
物語は始まりを告げる、この地点では登場人物が一人も存在
せずに。

《なでポってなんだよ!!? なでポじゃないとか訳が分からない
よ!!!??》

《説明……なでた人物を熱血系に変化……燃やすんじゃないんか
い!!!??》

「後でVTR見せて!!!??」

バカとテストと召喚獣の世界観で構成された物語が始まる

プロローグ（後書き）

当然のように不定期更新でございます。

あれ？主人公出てきてない！？………いえいえ、プロローグです。次からは我が主人公がでてきます。

ちなみにハーレムにはならず、完全にオリキャラの単独ヒロインとなります。

明久に好意を抱いているものはいますが失恋は決定済みですー（ぶっちゃけた！？）
では、また次回！

第一話：明久、クラス！？（前書き）

主要人物が出ていないプロローグだけというのもアレなので

追加で投下！

第一話：明久、クラス！？

『みんな、ぼくのいうことをしんじてくれないんだ』

ひとりの少年が何も無い空間に向かって……誰かに話しかけているかのように

泣きながら喚く……親も友人も全ての者が少年の言っている事を否定しているのだ。

もつとも、虐めというわけではなく、ただの戯言としてしか認識されていないだけ。

それを虐めというのであれば虐めなのだろうが……まだ実体化が不安定な

この時では、英霊の存在は認知されないのである。
少年以外には見えないのだから。

『仕方があるまい、我等は坊主にしか見えぬからのう』

『

』

外には聞こえない声……少年にのみ聞こえる声が少年の耳に入り込む。

人のない事を確認し、頭のおかしい人物であると認識されないために最大限の

注意を払っている気配がするのだ。

もつとも、人の言葉を介している片方に対してもう片方は静かに叫んでいるだけだった。

『にほんごでしゃべってよ、へらくれす』

『ヘラクレスは明久を心配しているんだよ』

明久と呼ばれた少年 吉井明久である がへらくれすと呼ばれた者に

対して話しかけていた。

圧倒的なまでの図体であり、幼い明久など軽く踏みつぶせそうである。

当然、この姿も明久以外にはまったく認識されていない。

ヘラクレス意外にも女性とも男性ともとれる声の高さの者が明久に對して、

ヘラクレスの言葉を訳して話しかけていた。

ヘラクレスとはギリシャ神話の最大の英雄であり、ここに存在しているのは

紛れも無く大英雄本人である。

『えるきどう……きんぴかのおうさまは？』

『誰が金アキヒサぴかだ馬鹿、一応王として認識しているのは褒めてやるが』

『まあまあ、落ち着けギルガメッシュ』

また異なる名前が出てきた。

淡い緑色の長髪を持つ男性にも女性にも取れる人形のような男性と黄金の印象しか

感じ取れない黄金の髪に真紅の瞳を持つ男性。

人形のような男性はエルキドウ、黄金の王はギルガメッシュ、人類最古の英雄王の

唯一無二の友人とかつてひとつだった世界を手中に収めていた最強

の英雄王である。

『明久、家に帰ってイスカンドルと一緒にゲームでもしたらいいと思うよ。』

今日は親御さんもお姉さんも帰ってこないんだから』

『よし、このあいだのりべんじだいですかんだる！』

『気が変わるのが早すぎだのう』

『それが、馬鹿アキヒサの良きところであらう』

最後の男は征服王と名高いイスカンドル……ヘラクレスには劣るが大柄な男であり、赤い髪と赤い髭が特徴的な美丈夫である。

本来なら出逢う筈のない存在と邂逅を果たし、友好を深めている明久は認識されて

いれば、確実に世間から大注目を浴びるのだろうが、残念ながら、明久自身の

評価のせいで信用がされていないのだ。

それでも、その嘘と断言されていることを抜けば学校では中心となつて人気を

誇っていた、男子女子問わず恋愛感情には満たない好意を抱かれるほどに。

『つて、あれ？』

『どうしました？明久（また、あの子かな？）』

ふと、明久が視線を感じたのでそちらの方向へと視線を向けたのだ

が、そこには
誰も居なかった。

否、居た事にかわりがなく、今でもいるのだが、明久の視線から逃れるように

隠れてしまっているだけだった。

もつとも、気配を察知できるエルキドゥにはあまり意味をもたらさないのだが。

しかし、あまり気にすることなくイスカンドルとのゲーム対決をいそいで行いたい

明久は気にすることなくさっさと走り去っていった。

『そういえば、今日の晩御飯は玉藻が作るみたいですよ』

『何！？急がば奴は稲荷寿司しかつくらぬではないか！！？』

エルキドゥの独白を聞いて、ギルガメッシュが急いで気配を遠ざかせる。

苦笑しながらもエルキドゥは親友のあとをついて行った。

ヘラクレスだけが視線を固定し続けていると、そこには銀色の髪をウェーブ状で

伸ばした少女がいた……明久に対して眩しく羨望を感じる視線を送りながら。

*

数年近く時間は流れ、少年はまだ少年ではあるが幼さがなくなり、英雄達も存在が

明らかにはなっていないものの、明久と共に居続けている。

両親と姉はアメリカに行き、英霊達は実体化が限定的な場所で可能となり、

家の収入が異常なほどに増えた。

英霊達は数のほとんど留守番を任されているのが多いのだが、それでも

4人ほどが霊体化しつつも明久にくっついて行動を共にしている。

「おはようございます西村先生」

「おはよう吉井 待て貴様らまだ時間に余裕はある」

明久が到着し、校門の前に立っている体格のよい教員 西村教諭
に挨拶し、
挨拶を返されると、周囲にいた生徒が一齐に時間の確認をしつつ駆け始めていた。

明久の学園での評価は馬鹿、完全に馬鹿である。

それは、本人である明久も承知しているのだが 授業態度や登校などでは

ごく普通に遅刻もなく騒ぎもしない（自習は別だが、これは全員に言える）。

その事を真に把握しているのは、明久の目の前に居る西村教諭だけだろう。

事あるごとに殴っているのだが、その原因は100%明久に問題があるのだ。

別に虐めというわけではない、程度によっては暴力もない。

「まったたく」

「多分、みんななりの冗談だと思いますよ？」

明久が苦笑しながら周りを見渡すと誰一人として視線を合わせなかった。

冗談ではなく、本当に遅刻の常習犯だと認識されていたらしい。

その事を理解した明久は、苦笑から乾いた笑いに変えて若干落ち込んだ。

確かに去年は完全な品行方正とは言い難い態度だったのだが、それは一緒に

つるんでいた人間も同様に言える 何故明久だけこういう理不尽な評価を

受けるのかは不明なのだが、おそらく馬鹿ということで済まされているのだろうか

予測しつつ明久は幸せが逃げると理解しながらため息をついていた。

「まあ、お前の努力は知っているし。その内評価されるだろ」

「ありがとうイスカandal先生」

「誰だ!？」

『声が似とるだけだろう、坊主』

トリアスロンで優秀な成績を修めており、鉄人という呼び名であれば知っている

西村教諭だが、明久の口から出てきた人物に心当たり（名前だけな

ら知っているが)
がなく、ツツコミを入れていた。
そのツツコミにあわせるかのようにイスカンドルが明久にツツコミ
を入れる。

「すみません、知り合いとそっくりな声だったので」

「まあ、混乱してたのだろうから仕方がないが　ほら、クラス
詳細表だ」

そう言つて、西村教諭は明久にクラス分けの紙が入った封書を渡す。
明久にだけ感じ取れる気配がのぞき込もうとしているのを察知して
いた。

明久の思惑通りに進めているのかどうかの確認のためである。

(代表になれる筈、なんども確認して予測があつてれば)

『まあ、張り出されている成績をもとにこのぐらいであれば代表
だと

確信が取れそうな点数にしぼったもんね』

そして、明久が封書を破って取り出した紙に書かれていた文字を確
認し

吉井明久　Eクラス

思わず西村教諭の顔を見ていた。

「なん……だと……」

「去年まで馬鹿なのではないかと思っていたが、認識を改めんな。」

とはいえ、本来ならFクラスなんだがテスト中に途中退出した者が居てな。

その影響で繰り上がりになったんだ」

『そういえばどこかの教室で倒れる音が聞こえたよね』

明久と違う教室で試験を受けていた生徒が途中退出で0点扱いとなったようだ。

体調管理も試験のうちという鬼のような校則のせいで明久のおおいなる野望が

軽く打ち砕かれた。

とはいえ、その生徒自身を責める気にはなれない……そういう事も含めて点数を

調整しなかった自分が悪いからである。

「Fクラス代表となってAクラスを征服するという野望が開始前にエンドロール。」

残り一年分は何を放映したらいいんですか！！？」

「知らん」

『試験召喚戦争が醍醐味なのだがのう』

試験召喚戦争はあくまでも、モチベーションを上げるための手段のひとつに

過ぎない

試験召喚戦争とは、戦争の名がつくとおりの戦争

であり、
実際に人間同士で殺し合いを行うわけではないが、科学とオカルトの奇妙な融合によって偶然出来た召喚獣という自分自身の分身のようなものを用いて

戦い合わせる戦争である。

ちなみに試験という単語がついている理由が、召喚獣自体がテストの点数によって

能力が固定される為であり、能力によって勝敗がわかるひとつの要素であるため、

勉強ではなく、試験という単語で通称としているのである。

「Eも下位クラスだから試験戦争に意気込みを持っているに違いない!!!」

「というか想定外だけど気にしない！代表じゃなくてもやりようはある!!!」

「やる気は結構だが、クラスの面子で判断しておけよ」

*

「ここがAクラスか、学校にしては豪華すぎる」

『去年のクラスに比べればましな程度だな』

ギルガメツシユの意見はとりあえずスルーしつつ明久は最高クラスである

Aクラスの室内の概要を確認していた。

机に該当する部分はシステムデスクであり、ノートパソコン・個人用の冷蔵庫、

場所ごとに気温を変化させることの可能な個人用の冷暖房器、システムデスクの

上にはお菓子がいくつか並べられており、いずれも高そうなものばかりだった。

おまけに広さは1学年で授業を行っていた教室の5倍もの広さである。

さらには恐ろしいことにAクラス専用の購買が後ろの方に陣取っていたのである。

休憩および泊り込み用の専用部屋や来客用の部屋まで存在していた。

『ええい、早急に試験召喚戦争を行わんのか。早く制圧したいのう』

征服が癖とはさすがは征服王というべきなのだろうか。

Aクラスに入っていた生徒の殆どが妙な寒気を覚えたらしくしきりに周囲を

見渡していたのは気のせいではないだろう。

ふと、明久が視線を感じたので視線のさきを見てみると日本人形のような容姿の

少女がジッと明久を見つめていた。

少女は明久の親友である霧島翔子……とある事情から仲良くなつて、霧島の恋の

応援を明久がしている状態である。

今、視線を送ってきている理由は明久が眺めすぎている事に対して、ちよっと

気になったただけだろう。その証拠に、すぐに視線を手元の参考書に持っていった。予習を始めていたからである。

「やっぱり霧島さんはAクラス……か」

悪意のない感情の視線だったためか、明久は先の視線でちよっぴり幸せな気分になつて浮かれていた……恋愛感情は無くてもあれだけの美少女に見られたら幸せにならないはずが、もちろん表情には出していないのだが、こんな光景を長く付き合っている友人などが見たら確実にバレバレだろう。

少なくとも実体ではない三名の人物がニヤニヤと（一人は親友に便乗してるだけ）

明久を眺めていたからである。

が、ここで急に見下すような視線を感じてそちらへ顔を向けると鋭い視線で

明久を射抜いている一人の男子生徒が居た。

視線はニヤニヤして気持ち悪いと訴えていたのである……訂正、明久は結局デレデレしていたようだった。

正論すぎて反論できないので明久は視線だけで謝って、その場を後にしていた。

その後、Bクラスの設備を見てみたが、購買・休憩室・接客室がなく、個人用では

ないが、公共の大型冷蔵庫が設置しており、個人用の冷暖房装置も付属、机は

システムデスク、椅子はリクライニングなのは一緒のようであり、教室の広さは

去年のクラスの3倍の広さである。

パソコンは共用のものがいくつか設置してあるのが見て取れた。

自動販売機が置いてあるのも特徴的だった……暖かい飲み物はあそこ
こで

購入するのだろうか……ここから飲み物は料金ありだということは理
解できた。

「一気に落ちるってわけじゃ無いんだねー」

Cクラスから冷暖房設備あり、共同の中型冷蔵庫有りにまで低下。

自動販売機もあったがBクラスは3台だったのに対して、こちらは
2台だけだ。

教室設備は去年のクラスのものとはほぼ代わり映えしないものになっ
ている。

広さ的には去年のクラスの2倍と広さも少し落ちてきている。

「だんだん格差があるのが見て取れるね」

『この分では最低クラスはどこまで酷いのか気になるわい』

Dクラス、冷暖房設備有りで自販機なしの保管用らしき中型冷蔵庫。
自動販売機も1台にまで減っていた。

教室の広さはCクラスと同じ広さで広さ的には大差は無いようだ。
そして明久の所属するEクラスだが、冷暖房設備はあるもののスト
ーブと

扇風機だけしか見当たらない。

冷蔵庫や自動販売機は存在せず、教室の広さは去年のクラスと変化
なし。

『普通の平均的教室ではあるのう』

『Fクラスは木造で昭和時代風の教室なのかな?』

「見に行ってみよう」

まだまだ時間は存在するので、明久は最低クラスであるFクラスの教室へと

足を運び始めていた。

余談だが、明久がEクラスの室内にはいり、席を確認してカバンを置いたことに

クラスメイトが目を見開いていた。

失礼ではあるのだが、明久は怒らず、必死にヘラクレスを抑えていた。

第一話：明久、クラス！？（後書き）

英霊達は基本的に明久に好意的です。

ではまた次回（〇・〇・〇）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422ba/>

バカとテストと英霊達

2012年1月11日23時51分発行